

剖検所見もあわせ報告する。

41) 門脈ガス血症, 門脈血栓症及び気腫性胆嚢炎を順次併発した急性虫垂炎による後腹膜膿瘍の1例

小林 康雄・杉本不二雄
 関矢 忠愛・斉藤 六温 (刈羽郡総合病院)
 植木 匡 (外科)
 中澤 俊郎・矢野 雅彦 (同 内科)
 森田 哲郎 (同 放射線科)

症例は61歳男性。高热, 腹痛にて平成11年7月17日当院内科に入院した。門脈ガス血症, 敗血症, DIC の診断にて保存的治療を開始。その後の CT にて, 上腸管膜静脈 (SMV) 内膿瘍及び急性虫垂炎の診断となり8月9日外科転科の上, 手術を施行。壊疽性虫垂炎及び SMA に沿った広範な棍棒状の後腹膜膿瘍を認め, 虫垂切除, 膿瘍ドレナージを行った。術後血栓症による門脈の完全閉塞を来し血栓溶解療法を施行, 更に第18病日気腫性胆嚢炎を併発するも PTGBD にて改善し, 第45病日軽快退院した。検索できた範囲で急性虫垂炎が門脈ガス血症の原因疾患となった報告は認められず, 注意を要する。

42) 急性気腫性胆嚢炎の3例の検討

植木 匡・杉本不二雄
 斉藤 六温・関矢 忠愛 (刈羽郡病院)
 小林 康雄 (外科)
 中沢 俊郎・矢野 雅彦 (同 内科)

急性気腫性胆嚢炎はガス産生菌により生ずる希な疾患である。【対象】1998年9月より1年間に3例の気腫性胆嚢炎を経験しこれを検討した。【結果】3例とも男性で年齢は41, 55および61才であった。腹部超音波検査および上腹部 CT 検査にて全例に胆嚢内ガス像を認め, うち2例で肝内胆管ガス像を認めた。治療は, 開腹による胆嚢摘出術を2例に対し施行し1例は経皮的胆嚢ドレナージのみで軽快した。開腹での2例で胆石を認めた。胆汁培養では2例が Clostridium で1例は citrobacter と klebsiella が起炎菌であった。術後経過は全例で術後2日目まで肺うっ血による低酸素血症があった。【結語】気腫性胆嚢炎を3例経験したので若干の文献的考察を加え報告する。

43) TIPS 施行後の Budd-Chiari 症候群に対する生体部分肝移植の経験

山本 智・佐藤 好信 (新潟大学)
 畠山 勝義 (第一外科)
 林 道廣・田中 紘一 (京都大学)
 移植外科

TIPS 施行後の Budd-Chiari 症候群に対する生体部分肝移植を経験したので, その術式を中心に報告する。患者は26歳男性。1992年に吐血で発症し, 腹水・腹壁静脈の怒張などを認められ, TIPS を施行された。一時症状の改善を認めるも, 1995年に下大静脈の狭窄が出現し, angioplasty が施行された。1999.1月に下大静脈の再狭窄と TIPS の閉塞を認められたため, 5月に下大静脈の狭窄解除と閉塞門脈の再建を伴った右葉グラフト生体部分肝移植を施行した。術後, 下大静脈の狭窄は解除され, 門脈血流も良好で, 本術式は Budd-Chiari 症候群で下大静脈の狭窄を伴った症例に対して有効であると考えられた。

第2回新潟 GHP 研究会

日 時 平成12年2月5日 (土)
 午後3時より
 会 場 新潟大学医学部 有壬記念館

1. 一般演題

1) 総合病院精神医学の最近の動向

— 学会誌「General Hospital Psychiatry」
 と「総合病院精神医学」からの検討 —

塩入 俊樹・寺田 誠史 (新潟大学)
 柴矢 俊幸 (精神医学教室)

日米の総合病院精神医学の専門誌である, 「総合病院精神医学 (総精医)」および「General Hospital Psychiatry (GHP)」を基にして, 1996年から1999年までの最近4年間における日米の総合病院精神医学の動向について比較検討を加えた。方法としては, 「総精医」では, 過去4年間の学会発表の抄録を, そして「GHP」では掲載原著論文について, その内容を基に分類を試み, 両誌の比較検討を行った。「総精医」の総抄録数は505